

エンタ目

—— 仙頭 武則

■ 韓国映画界

ソウルにある韓国映像資料院(KOFA)は非営利公共機関で、無料で映画上映プログラムを運営している。ここで、真摯に映画と向き合っている人たちと交流し、韓国映画界の奥深さに感銘を受けた。

十月十一日から八日間にわたり「青山真治追悼特集」と題して長編六作品と中編三作品が上映された。私は十六日、「EUREKA」上映後にオンラインでトークと質疑応答に参加。司会は韓国の映画雑誌「シネ21」のイ・ダヘ記者。通訳はホン・ジョンさん。二人とも青山監督が訪韓した時に関わった方々だ。青山監督とのつながりを丁寧にリサーチした人選に、故人への敬意が示されていると感じた。プログラムを企画したパク・ジニさんも、フェローシ

隆盛の理由 交流で実感



オンラインでトークに参加する筆者

ップとして早稲田大で映画を研究。スタッフ陣の「本気」を感じた。

当日、百人を優に超える二十〜三十代の若い観客で劇場は埋め尽くされた。イ記者の進行は「あなたのキネマ旬報に寄せられた追悼文によれば」とか「青山監督のインタビュー記事には」などと必ず

引用が提示され、調査・取材後の考察を経た質問であることが伝わった。観客との質疑応答では挙手が止まることなく、「最後のせりふはジョン・フォードの『捜索者』から来るものだと思いますが、他にも引用があれば教えてください」といふ質問がきき、豊かな知識を持った映画ファンの存在に驚いた。「プロデューサーとして大変な苦労があったと思う。敬意を表す」と言われた時は胸が詰まった。いつもなら笑いのひとつでも取らねばと愚かなことをたたくらむ私だが、そんな余裕はかけらもなく、気がつけば二時間近くがたっていた。

公共機関と観客、メディアが成長してきた結果、今の韓国映画の隆盛があるのだと実感する貴重な体験だった。

(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー 次回掲載は十二月十五日)